

松ヶ丘・白幡・西寺尾地区

神奈川区

地域に根づく「丘の手文化」から
提案された、新たな住まい方

洋館群が語る、 「臨海丘の手」の誕生

港を望む緑豊かな「丘の手」に、ひっそりとたたずむ洋館群……。今ではその数は少なくなりましたが、横浜港や海岸線に沿って南北に走る下末吉台地の崖線上には、ところどころにこうした洋館が点在する。

このような洋館群は、「関内・関外地区」を南北から見下ろす2つの丘——山手の丘と野毛山に端を発している。山手の丘は、外国人居留地となり、本牧・根岸から屏風ヶ浦、杉田、富岡へと至る根岸湾を望む南の崖線のつながりの中で、西洋人による避暑地別荘文化を花開かせる。

一方、同じ頃、野毛山は、茂木惣兵衛や原善三郎など日本人居留地の商人が洋館

を棟に持つ居宅を構えた。それが皮切りとなり、西区、神奈川区、鶴見区の旧東海道に沿った北の崖線に、横浜商人の別荘地が次々と建てられた。

この場合の別荘とは、避暑や養生の場ではなく、お店とは別の家という意味である。それまで商人の暮らしは、基本的に職住同一地区だった。だが、横浜商人は商いの拠点を関内に残したまま、住居を丘の手に設け、職住分離を始めたのである。

平成12年、松ヶ丘の住宅街で一軒の洋館が取り壊されることになった。調査の結果、このライト風建築の2階建て洋館は、鶴屋町を埋め立てた鶴屋の子孫の屋敷として大正期に建てられたことが判明した。さらに、この屋敷には、横浜の実業家やその妻たち、あるいは大岡昇平や

Area Data



●大横浜土地家内繪圖（昭和6年発行・神奈川県立図書館蔵）
横浜市が「新興住宅地」の入居促進を目的に発行したもの。
当時の「臨海丘の手」の住宅分布が良く分かる。

●松ヶ丘・白幡・西寺尾地区

地勢 JR横浜駅の北側および北東に広がる丘陵地。標高20～40メートル。東方に海、西方に富士山が見える立地である一方、JR、京急、東急、市営地下鉄が乗り入れ、第三京浜、首都高速などとのアクセスもよい交通至便の地でもある。

歴史 本牧・根岸、屏風ヶ浦、杉田、富岡、長浜に至るエリアは、明治期に避暑地別荘地として発展。近郊の農村も、いち早く牧場経営や西洋野菜、花きなどの栽培などを手掛け、西洋流ライフスタイルを支える生産基地となった。松ヶ丘地区は明治から大正にかけて、港に関連する実業家や豪商たちが住まいを構えた地。白楽・白幡地区は、関東大震災後、横浜港周辺の会社に勤務するホワイトカラー層の住宅地となった。

●富岡海荘図巻（横浜開港資料館蔵） 根岸湾の崖線の絶景を三条実美が絵師に描かせたもの



八幡鼻

十二天鼻

●丘の手の斜面開発



●注1 「一間洋館」とは、全体が和風建築で玄関の横に洋間（洋館）が一間ある建築様式。現在建築士をメンバーとする市民グループによって調査が進んでおり、戦前の横浜市の居住文化の一端が少しずつ解き明かされている。

横山大観といった文学者や芸術家などが出入りし、サロンの機能を果たしていたことがわかった。
同洋館に象徴されるように、三ツ沢から松ヶ丘にかけての丘陵地には、明治か

ら大正にかけて、港に関連する実業家や豪商や、埋め立てで活躍した実業家の住まいや別荘が数多く存在し、独自のコミュニティがつくられた。これらの地区には昔から教会なども多く、ある面では南

の崖線の山手居留地に似ている。ただ、山手の文化が外国人によってもたらされたのに対し、三ツ沢・松ヶ丘地区は横浜市民が最初に職住分離を図ったエリアであり、「丘の手文化」とでも呼べる独自の文化を市民が自ら築いてきたエリアなのである。

また、同じ丘の手でも、白楽・白幡地区は、関東大震災以後、横浜港周辺の会社に勤務するホワイトカラー層の居住地として形成されたエリアである。特に、昭和3年の東横線開通（神奈川・桜木町間）で港と丘陵地が結びついたことが、住宅地の形成を促した。彼らは当時の文化住宅であった「一間洋館」を好んで建てた。「二間洋館」はまさに和洋折衷の住様式であり、これらもまた、臨海丘の手エリアの洋館分布の一画を占めている。

（注1）

地域に求められる高齢者の生活支援

現在の松ヶ丘や白幡の住宅地としての特徴は、東京や横浜都心に近い利便性と、斜面緑地や屋敷林によって守られてきた住宅街としての、閑静さや景観の良さをあわせ持っていることにある。

ただ、時代を経るにしたがい、かつて広大だった敷地は分割され、社宅や一般住宅に変わってしまっている。特に、近年は都心回帰の影響もあり、今も小規模分譲住

宅地やマンションの開発が続いている。これによって臨海丘の手の重要なランドマークとなっている斜面緑地が失われようとしている。

また、住民の高齢化が地域の大きな課題になりつつある。たとえば、松ヶ丘地区などでは、洋館に住む高齢夫婦や一人暮らしの老年寄りが、あまり地域と関わることなく生活を続けているケースも多い。神奈川区の調査では、松ヶ丘の高齢者世帯は経済的にはゆとりがあるが、身の回りの世話をしてくれる人がいない人が7割を占めていることがわかった。

高齢となれば、広い庭の手入れも負担になる。またこれらの地区は、駅や商業施設が比較的近くにある環境とはいえ、坂の上り降りもつらくなる。

これまでは、丘の手文化の一つの特徴として、個人のプライバシーを尊重し、お互い干渉しあわないライフスタイルがあったかもしれない。一方、これらの地区では、ひとり暮らしや寝たきりの高齢者世帯などへの「ふれあい訪問活動」や昼食会、レクリエーションなどを通じた高齢者との交流などが、今日、地域のボランティアにより行われ始めている。

今後は孤立する高齢者に対してこのようなコミュニティ活動をいかに展開していくかが地域に問われるだろう。